

サーンクヤ哲学における解脱の問題

村上 真 完

一 人生苦をその考察の出発点とし、その苦を減ずること、即ち解脱を探索することを標榜する *Saṃkhyā-Kārikā*（数論頌、以下SK）は、純粹精神原理 *puruṣa*（靈我、人我、神我）と、いわば物質原理ともいふべき *prakṛti*（原質、自性 ||

pradhāna, 勝因）との二元論を説き、解脱については、しばしば靈我の解脱^{プルシヤ}といいながら、原質が解脱すると明言する。

そこで、解脱の主体に関して、いずれがSKの立場であり、それがどのような意味なのか、ということを考えてみたい。

二 まず靈我解脱の思弁についてみると、SKは靈我^{プルシヤ}と原質^{プラクリ}との両原理の結合——それは具体的なる人間存在と考える——に関しては、

『靈我が勝因^{プルシヤ}を見る（||享受する）ために、また「勝因から」独存するために、跛者と盲者のように両者も結合する。創造はそれによつて行われる』（SK. 21）

という。この享受と独存とが靈我の目的とされるのであり、独存とは結局、解脱であるから靈我解脱の方向が示されている。

る。そして、原質の創造活動は『それぞれの靈我の解脱のため』（SK. 56）であるとも、『勝因の活動も靈我解脱の誘因である』（SK. 57）、『未顕現（||原質）も靈我解脱のために活動する』（SK. 58）ともいわれる。

三 しかし、一方、靈我は独存であるといわれ（SK. 19）、そして独存とは結局、完全な解脱を意味する（SK. 68）。従つて靈我はいわば本来解脱せるものであつて、さらに解脱も繫縛もあり得ないという思弁が認められて来る。

『それゆえに、いかなる「靈我」も繫縛せられず、また解脱もせず、輪廻もしない。種々なるものの依所となつている原質が輪廻し、繫縛され、そして解脱する』（SK. 62）

と明言される。清辨『般若燈論』第十八章の伝えるところによれば、これが原質解脱論の根拠とされる。

四 SKは第六三頌までで、ほぼサーンクヤ哲学の原理を説くのであるが、次の第六四頌には、

『このような原理の教習によつて、「私は」ない（*nāsmi*）、私の

「もの」ではない (na m)¹ 私ではない (nāham)」という、余すところのない、誤謬がないために清浄な純一な (＝独存なる) 知が生ずる』

という。ここで、まず、数習という語が出ているが、この数習するもの (主体) は何であろうか。まず、サーンクチャ哲学を学ぶ実践者であろうと考えられる。そうすると「知が生ずる」というのも、その実践者においてであろうと考えられる。SK によれば知は覚^{ブッディ}の情態の一つに数えられる (p. 51)。から、覚に知が生ずるとしても、結局、具体的なひとに知が生ずる、と考えることをさまたげるものではないであろう。

サーンクチャの原理は、いわば人間存在の分析であろうと考えられる。そしてそれゆえ、その原理の数習とは、実践者において、自らを反省し省察することを意味するであろう。ここに、自分自身を霊我の立場において観察するか、あるいは原質の方に立つて見るか、ということも問題にすることができる。こういう面から、解脱の主体が、霊我か原質かを改めて考えることもできよう。

そこで、知の内容をなす『「私は」ない、私の「もの」ではない、私ではない』という三句の意味をたずね、その一人称の「私」が霊我であるのか、それとも原質であるのかを考えてみよう。SK 自体からは、一見、「私」の否定 (自己否定)

サーンクチャ哲学における解脱の問題 (村 上)

の意味が理解されるにすぎないようである。しかし SK の注釈書『金七十論』(K)² Gauḍapādabhāṣya (G), Mahāranyti (M), Yuktīpīka (Y), Vacaspathiśāstra's Saṃkhyatattva-kūmundī (Δ), Śaṅkara's Jyotamāṅgalā (J), Nārāyaṇārtha's Saṃkhyacandrika (C) および Saṃkhyasūtra に対する Vijnānabhikṣu's Saṃkhyapravacanaśāstra (Vi) によれば、殆ど一致して、この「私」を霊我と見ている。すなわち、(一)私は行為主体ではない (V, C, Vi)。行為主体は原質に属す、身体には私がなく原質がある (Y)、私は諸原理ではない (M)、(二)身体は私のものではない (K, G, J)、諸原理は私のものではない (M)、苦は私のものではない (C)、所有主ではない (V)、(三)身体等は私ではない (K, Y)、私は諸原理に属するものではない (M)、原質も私ではない (J) 等という (次の一覧参照)。これは要するに、原質に属するものは私でもなく、私のものでもない³と否定しつつ、私⁴霊我と見るのである。これは自らは霊我の立場においているのである。すなわち霊我を自覚しているのである。

SK. 64 の nāsmi, na me, nāham の解釈一覧	(一) nāsmi の解釈	X 一切事及身、皆自性所作、〔非 [*] 無、非我、非我所、悉属 ³ 自性 ² 故。(* 非無の二字は三本に欠)
------------------------------------	---------------	--

サートンと哲学における解脱の問題 (村 上)

G	<i>nāsmi</i> nāham eva bhavāmi
M	<i>nāsmi</i> tattvāni
Y	ekavāpi asmitārūpasya parikalpitaivāyabhedapratīṣedham- ukhena <i>nāsmi na me nāham ity aparīṣaṇam</i>
V	(1) <i>nāsmi</i> ity ātmam kriyāmātram niṣedhati/ (2) <i>nā 'smi</i> iti puruṣo'smi na prasavadharmā/
J	yad etat sukṣmāśaritam bhautikam ca tasmim na bhavāmi, api tu prakṛtiḥ/
C	asmity aśya <i>na kartāsmity</i> arthaḥ tena buddhi-bhinnō'ham iti prāptam/ (HSS ㄥ ㄗ ㄗ)
Vi	<i>nā 'smi</i> 'ity ātmanah karitvanīṣedhaḥ (p. 107)
A	rañ-bhīn-gyi char gīogs-paḥi dbaṇ-po-la-sogs-pa <i>nañ-gi byed-pa</i> bdaḡ med-paḥi yul-la blos <i>bdaḡ med-par lla-bar*</i> <i>nar-hāsin-pa ldog-paḥi phyir/</i> nar-hāsin med-la/ (P. vol. 97, p. 196e ⁷⁻⁸ ; D. 71a ¹⁻²) (ㄲ ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㄷ ㄷ Pr. ㉪° P. 95, 223 e ⁷ ; D. 184a ⁸) * lla-bas Pr.
T	(1) bdaḡ kyañ skyes-bu ḥdīḥi ma yin-la/ (P. vol. 96e ⁴ ; D. 230b ⁴) (2) blos brags- (P. brags-) paḥi rjes-su byed-paḥi skyes- bus bdaḡ kyañ ḥdīḥi ma yin-la/ ḥdi (P. la) yañ bdaḡ-gi ma yin-no shes-bya-ba-ni…… (P. 96, p. 110e ⁹ ; D. 241b ⁵⁻⁶)

(ㄷ)	na me の 解釈
K	一切事及身、皆自性所作、……非我所、悉屬自性。故。(ㄷ 参見 46)
G	<i>na me</i> mama śaritam tat, yato 'ham anyāḥ śaritam anyat/
M	<i>na me</i> tattvāni
Y	ㄷ 参見 46°
V	(1) nāham iti/ ata eva <i>na me/</i> kartā hi svāmitāṃ labhate, *laddhāvāt tu *kutaḥ svābhābhāvīki svāmitā-ity arthaḥ/ *……* tasmāt ㄱ ㄲ ㄴ ㄷ ㄹ ㄷ ㄷ (KSS)
	(2) akarttvāc ca na svāmitā-ity āha <i>na me</i> iti/
J	<i>na ma</i> iyādi/na mama-idam (= śaritam) api tu prakṛteḥ.
C	<i>na me</i> duḥkham iti śeṣaḥ
Vi	<i>na me</i> iti saṅga-nīṣedhaḥ
A	<i>yid bdaḡ ma yin-pa</i> bloḥi char gīogs-pa <i>yañ</i> rañ-las gshan- pa skyes-bu <i>gshan-gyi don lus dan dbaṇ-poḥi yul-la-dag-la</i> dmigs-par byed-pa-na ḥdi ni ṇaḥi ma yin-gyi skyes-bu gs- han-gyi yin-no śham-pas <i>ñe-yir-hāsin-pa mi hīng-paḥi phyir</i> <i>ña-yir-hāsin-pa yañ med-pas/</i> (P. 97, p. 169e ^{8-197a} ; D. 71 a ²⁻⁸ . ㄲ ㄱ ㄴ ㄷ ㄹ ㄷ ㄷ Pr. ㉪° P. 95, P. 233e ⁷⁻⁸ ; D. 184a ⁹)
T	(1) skyes-bu ḥdi bdaḡ-gi ma yin-no (P. 96, p. 105e ⁴ ; D. 230b ⁴)

の「もの」ではない」と、この真実を見ることが生ずると（中略）、^{（3）}靈我から原質が解脱するのである。』

という。これは考える主体Ⅱ我を原質の方において、原質に属する我（自己、私）は靈我と異なること、靈我との間に、所有所属の関係がないと知ることである。そして、その直前には『我と我所とがないと理解するか、目的がはたされると、恩恵を与えた原質は解脱する』云々といわれており、その説明として前記の文が続くのである。したがって、原質の方に属する自己（我）を否定するのである。

六 サートンクァ哲学としては、原質に属する私の否定だけで終るのではなく、永遠不変なる靈我を認めているから、原質に属する（いわば低次の）自我を否定し去ると、ここに自我の転換が行われて、永遠なる靈我を自我として意識することが可能になると考えられる。そしてその自我の転換以後においては、自らを靈我の立場において、原質に属する自我（日常的自我）を他と見ることが可能となるであろう。

SK 六四の諸註釈書はこの靈我自覚以後の段階として、靈我の立場から、原質に属するものを他とするのであり、『思^{タルカ}火^{ジャアラ}』の伝える原質解脱論は、それ以前の段階として、原質に属する自我を自ら否定する、と理解できよう。^{（4）}

このように考えると、原質解脱と称されるものも、結局、靈我解脱に帰着することになるであろう。苦の滅を目的とし

て掲げるSKとしては、解脱も人間の解脱が問題であり、靈我解脱も、原質解脱も帰するところは一つであるはずである。

SKが原質解脱をいう趣旨は、靈我が本来解脱せるものであるから、更に解脱することもないというにある如くであるが、そうであるとしても、人間の解脱としては、実践者が原質と靈我との相違を知り、原質に属する自我を否定して、本来解脱せる靈我を自覚するのでなければならぬ。『思^{タルカ}火^{ジャアラ}』によれば、その原質に属する自我の否定にもとずいて、原質解脱があると考えられるが、一方SKがくりかえし靈我解脱をいうのは、その靈我自覚にもとずく解脱を示すのであろう。

七 SK 六四をめぐって、右のように、靈我の立場で理解すると、次のSK 六四―六八に続く文脈もよく理解できる。SK 六五には「その知によつて能産性を停止した原質を靈我が観覧者のように見る」（取意）といい、靈我を主語とし、主体が靈我であることを示す。次に、靈我と原質との区別が知られると、両者間に結合があつても、創造の動機がなく（SK 66）、^{（5）}潜^{サントラ}勢力の力によつて、しばらく身体を保持し（SK 67）、^{（6）}身体との分離が得られると……独存に達する』（SK 68）という。ここには結局、靈我と原質との区別知を得た実践者が死後に独存すなわち完全な解脱に達するといっているのであろうが、それを分析的に考えるならば、その主体は、独存に達するというから、靈我と考えられる。靈我は独存で本来解脱せるもので

あつても、人が靈我を自覚し、靈我に帰するところに解脱があると理解できるであろう。GによればSKは六九頌をもつて終るが、SK六九には「靈我の目的の知 *puruṣārthajñāna* が大仙によつて説かれた」という。靈我の目的とは、諸註釈は一致して、靈我の解脱と解する。SKは最後まで靈我の目的に解脱をあてており、結局、靈我解脱を主に主張したものと考えることができる。

八 清辨の『般若燈論』により、SK六二のみを典拠として、SKの立場を原質解脱に限定すると、サーンクヤ哲学の解脱論の趣旨を見誤るおそれがある。また『般若燈論』および『広註』^アは、サーンクヤでは「我執も我所執もない」といっても、我^アをみとめる限り我執、我所執はなくなる^イ、と難ずるが、サーンクヤ説として妥当であるかどうかは、改めて検討しなければならない。

- 1 羽田野伯猷「数論派における解脱論と数論偈」(印仏研一ノ二)
- 2*de-dag-gi bdag-kyan gshan-la ran-bshin gshan-no/*
sñam-pahi blo-ni log-par la-ba yin-te/ de-las gshan ma
yin pahi phyir-ro/ (P.95, p.22a⁴; D.184a⁵)

* なおPは『影印北京版西藏大藏經』Dはデルゲ版西藏大藏經の略号。

- 3 *des-na grans-can de-dag-gi blo bdag-kyan gshan-la/ ran-*
bshin yan gshan-no sñam-pahi blo de-ni log-par la-ba yin-te/
.....(P.97, p.197d²⁻³; D.72a⁶⁻⁷) (イタリヤ部はPr.の文に

サーンクヤ哲学における解脱の問題(村上)

同じ)、*blo bdag-kyan gshan-la sñin-stops dan rdul dan mun-*
pahi yon-tan cha mham-pa shes bya-bahi ran-bshin yan gshan-
no sñam-pahi blo log-par la-ba de-ni hbaq-shig-pa-nid- kyi
(P. kyis を訂正) *śes-pa skyes-pahi rgyu ma yin-pas*.....
(P.97, p.197d⁵⁻⁷; D.72b⁸⁻⁹)

- 4 *bdag-kyan skyes-bu hūiñ ma yin-la/ skyes-bu hūi yan bd-*
ag-gi ma yin-no shes hūiñ de-kho-na-nid mthoñ-ba skyes-
pa-na.....*skyes-bu-las ran-bshin grol-pa yin-no/* (P. vol. 96,
p.105c⁴⁻⁶; D.230b⁴⁻⁵)

- 5 *bdag dan bdag-gi med rtogs-paham/ don byas-pa-na rjes*
bzun-ba/ ran-bshin-gyis ni grol yin-phyir/ de-nid yin-par
grans-can smra/ (P. vol. 96, p.105c²⁻³; D.230b²⁻³)

6 Gには「まさに私はないのである」といって、まず、自我の否定がみられるが、その否定される自我は原質の方に属するのである。従つて次に「それは私の身体ではない」という表現があつて、私||靈我ということを示唆している。

なおサーンクヤの解脱説の中には、構成要素(||徳)を解脱の主体とするものがある。SK三七に対するM註には、「三構成要素が覺、我慢、五唯、十一根はそれぞれ別である」と原理を覺つて解脱にいたる」という。これも結局、原質解脱にはかならないものである。

* 拙稿「サーンクヤ(数論)の解脱の主体について——サーンクヤ・カリーカー(数論頌)六四をめぐる——」(佐藤密雄先生古稀記念論文集仏教思想論叢所収)参照。

(昭和47年度科学研究費一般研究Dによる研究成果の一部)